室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

自尊感情(self-esteem)と学生生活への適応に関する一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 信介 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3390

自尊感情（self-esteem）と学生生活への適応に関する一考察

清　水　信　介

A Study on the Relations Between Self-esteem and Some Indices of Adjustment in Student Life

Nobusuke Shimizu

Abstract

The present study was designed to assess the relation between self-esteem and adjustment pattern in student life as measured by questionnaire. Subjects were 232 freshmen and 179 juniors at Muroran Institute of Technology. The self-esteem of the students were measured by Rosenberg's self-esteem scale. In the freshmen group, 32 high scorers were selected as high self-esteem (H−SE) group and 37 low scorers as low self-esteem (L−SE) group. And also in the juniors, 31 high scorers and 34 low scorers were selected. The responses on each item of the questionnaire about adjustment in student life were compared between H−SE and L−SE groups.

I　はじめに

自尊感情（self-esteem）は，自己概念あるいは自己同一性の中核をなすものであり，個人の人格適応や社会行動を規定する重要な内的要因の１つである。

自尊感情については，W. James (1890) の論考以来，多くの人々によってその重要性と意義が指摘されている。近年注目されているErikson の人格発達理論においても，人生早期からの自尊感情の獲得と発達が自我同一性の形成にとって重要であることが強調されている。そこで言われる自尊感情の高さとは，

幼児的な万能感の自己愛的な確認ではなく[1]，また単なる自己評価の高さとは必ずしも同義ではない。それは，具体的な対人交流や社会的現実の中で自己の行動が受容され承認される体験を通して，個人が得てくるところの現実的な自己評価，自己確信なのである。

ところで，自尊感情自体についての実証的研究の歴史はまだ比較的浅いものである。近年，自尊感情の測定に関して，質問紙法（Coopersmith (1959)[2]，Rosenberg (1965)[3]），投影的方法（Ziller et al (1969)[4]），SD 法（意味微分法）によるもの（Lyell (1973)[5]，Rathus (1973)[6]）など種々の方法が考案されてきた。我が国でも，海保ら（1968)[7]，松下（1969)[8]，遠藤ら（1972[9]，1974[10]）によって自尊感情の測定が試みられている。こうした測定法の開発とともに，自尊感情の社会的形成条件，自尊感情の機能や他の変数との関係などについて実証的研究が蓄積されつつある。

本研究は，大学生を調査対象として，自尊感情と学生生活へのかかわり方の関係を検討しようとするものである。

大学生活の始まりは，内的にも外的にも多くの変化を学生にもたらす。外的な面で言えば，たとえば住居，生活様式，教育形態，人間関係などの面での変化を，また内的には受験による拘束・重圧からの解放，目標の達成や喪失，失意や挫折の経験をはじめとするさまざまの変化を体験する。そうした変化を契機として，それまで潜在していた，もしくは棚上げになっていた問題が噴出してくることも少なくない。学生は，大なり小なり，そのような内外の変化や問題を経験しながら自己の生活を再体制化していくのであり，それら全体を通して自己の確立という青年期における発達課題を達成していく訳である。そして，そのような過程において自尊感情の問題が重要な役割を果たすことを，われわれはスチューデント・アパシーをはじめとする臨床例を通じて知っている。

そこで，以下では，一般学生に関して，質問紙法によって測定された自尊感情の高い群と低い群の学生生活へのかかわり方，適応状況を比較検討する。

Ⅱ　調査方法

1.　被験者および調査手続

本研究で用いる資料は，昭和56年11月下旬から12月上旬にかけて室蘭工業大学工学部第一部および第二部の学生に対して実施された「学生生活に関する調査」[11]の一部である。この調査は，工学部第一部においては，1年目学生は全学科，2，3，4年目は特定6学科の学生を対象に行なわれたが，ここでは第一部1年目232名および3年目179名の資料にもとづく結果を報告する。

2.　測定項目

(1)　自尊感情尺度

Rosenberg (1965)[3]によって作成された self-esteem scale を星野(1970)[12]が邦訳したものを使用した。この尺度は，10項目から成り，各項目は4段階で評定される。自尊感情得点は理論上10～40の範囲に分布する。Rosenberg の自尊感情尺度では，自己に対して「これでよい(good enough)」と感ずる場合，つまり自分が価値のある人間であると感じ，ありのままの自分を尊敬する場合を測定しようとする。

(2)　学生生活への適応に関する測度

学生生活へのかかわり方，適応状況をとらえるものとして，以下の測度を用いる。

①　所属学科への満足度

これは，設問「あなたは今の学科に満足していますか」に対して「1.全然満足していない～5.非常に満足している」の5段階尺度で評定させ測定した。

②　学科に対する適性度評価

設問「自分が今の学科に適していると思いますか」に対して5段階尺度で評定させた。

③　入学時と比較した現在の勉学意欲

設問「入学時に比べると現在のあなたの勉学意欲はどうですか」に対して「あがっている」，「さがっている」，「わからない」の3件法で回答させた。

④　普段の勉強の程度

設問「あなたは，ふだん（試験時期を除いて）どの程度勉強していますか」に対して4段階で回答させた。

⑤　学生生活の諸側面についての期待度と充足度

学生生活の諸側面として13項目を用意し，それらについて「入学時にどの程度期待していたか」，また「現在どの程度みたされているか」を5段階尺度で評定させた。

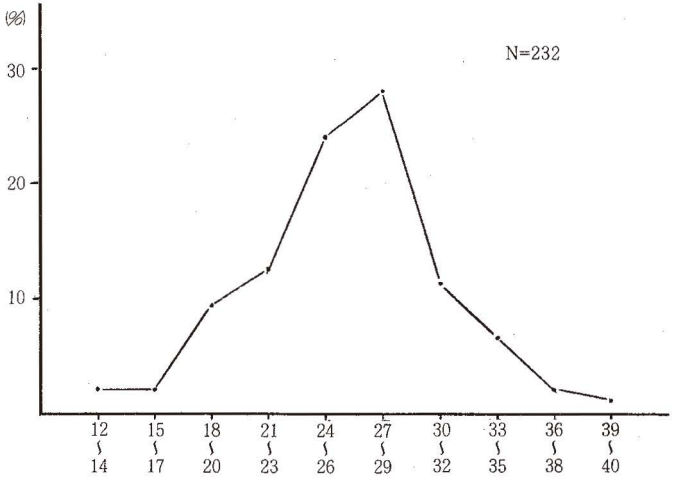
⑥　現在の不安・悩み

現在不安に思っていることや悩んでいることの有無を問い，その内容について予め設定した14項目の中から複数選択でチェックさせた。

III　結果と考察

1.　自尊感情尺度における高得点群と低得点群の設定

1年目学生232名の自尊感情得点の分布は図―1のとおりである。得点の平均26.18，標準偏差5.11でほぼ正規分布を示している。



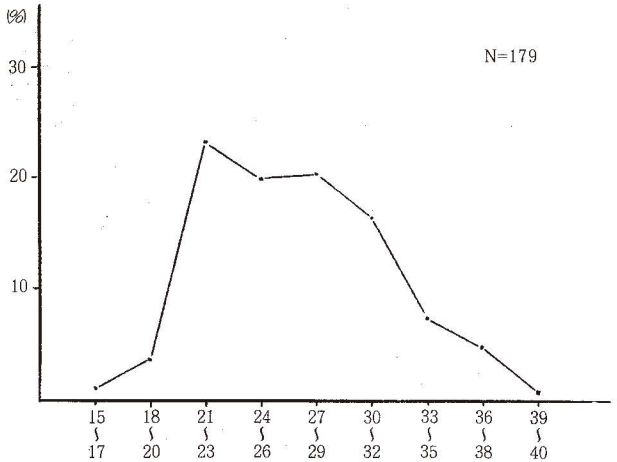
図―1　自尊感情尺度の得点分布―1年目―

ここでは，平均値＋１標準偏差以上の者を自尊感情の高い群（得点 31.29以上。以下 H—SE 群と呼ぶ），平均値－１標準偏差以下の者を自尊感情の低い群（得点21.07以下。以下 L—SE 群と呼ぶ）とする。結果は表－１のようになる。なお，H—SE 群と L—SE 群の自尊感情得点の間には有意差が認められる。

表－１　１年目学生における H—SE 群，L—SE 群

	人　数	平　均	標準偏差	t 検定
H—SE 群	32	34.40	2.40	t= 27.42 P<.01
L—SE 群	37	18.05	2.48	

３年目学生179名（平均26.89，標準偏差4.69）についても，同様の手続で H—SE 群，L—SE 群を設けた（図－２，表－２）。



図－２　自尊感情尺度の得点分布－３年目－

表－２　３年目学生における H—SE 群，L—SE群

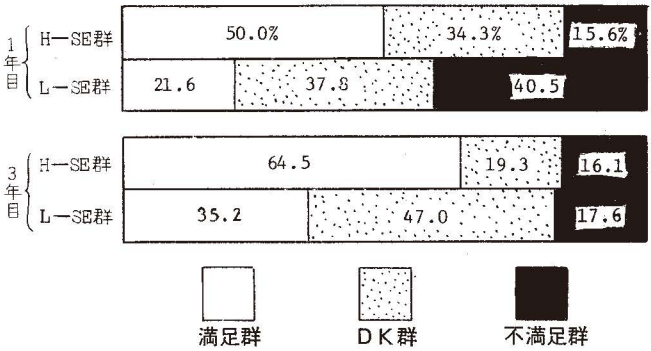
	人　数	平　均	標準偏差	t 検定
H—SE 群	31	34.19	2.13	t= 30.32 P<.01
L—SE 群	34	20.88	1.55	

以下，1年目および3年目学生において，H—SE 群と L—SE 群の学生生活への適応の測度の比較を行なう。

2. 所属学科への満足度

図—3は，1年目および3年目における H—SE 群と L—SE 群の所属学科への満足度を示したものである。

1年目の H—SE 群では L—SE 群におけるよりも有意に満足群（「かなり満足している」，「非常に満足している」と回答）が多く，不満足群（「あまり満足していない」，「全然満足していない」と回答）が少ない（x^2=7. 70, df=2, P<.025)。



図—3 所属学科への満足度

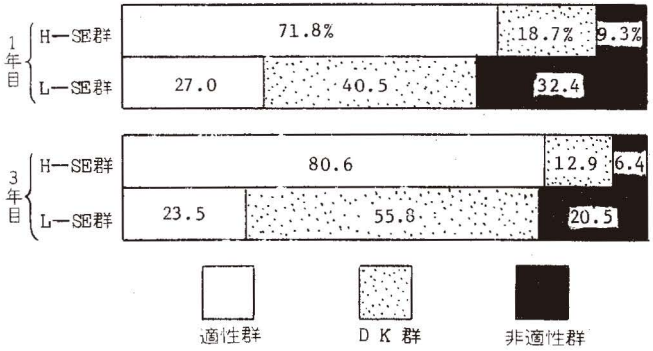
3年目においても，同様に，H—SE 群の満足群が有意に多くなっているが（x^2=6. 51, df=2, P<.05)，それとともに L—SE 群において DK 群（「わからない」と回答）が47%を占めているのが注目される。

以上の結果から，1年目，3年目とも，自尊感情の高い者が低い者よりも自己の所属する学科に対して満足しているといえる。

3. 所属学科に対する自己の適性度評価

図—4は所属学科に対する自己の適性度評価の結果を示したものである。

1年目の H—SE 群では L—SE 群におけるよりも有意に適性群（「どちらかといえば適している」，「適している」）が多く，非適性群（「どちらかといえば適していない」，「適していない」）が少ない（x^2=14. 09, df=2, P<.01)。



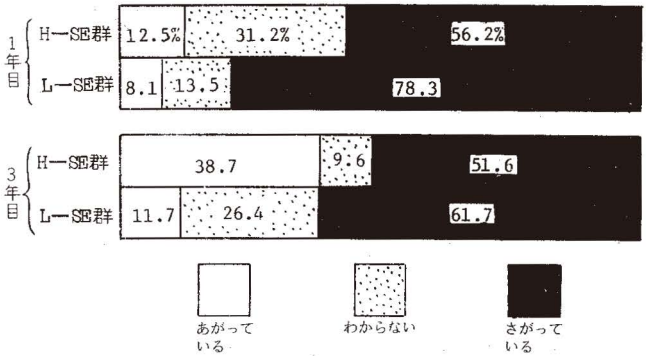
図—4　所属学科に対する自己の適性評価

3年目においても，H—SE 群は L—SE 群よりも所属学科に適しているとみる度合が有意に強い（x^2=21. 22, df=2, P<.005)。

また，1年目，3年目ともに，L—SE 群において DK 群が多いことが注目される。これは，自尊感情の低い者が置かれた状況とのかかわりで自己を評価したり定位したりすることが出来にくいことを示唆するものであろう。しかも，それが3年目においてより強く認められる点は興味深い。

4.　入学時と比較した現在の勉学意欲

入学時と比較した現在の勉学意欲についての回答結果は図—5のとおりである。



図—5　入学時と比較した勉学意欲

1年目学生についてみると，勉学意欲がさがっているという回答は H—SE 群よりも L—SE 群において多いという傾向がうかがえるが，有意差は認められない (x^2=4. 04, df=2)。

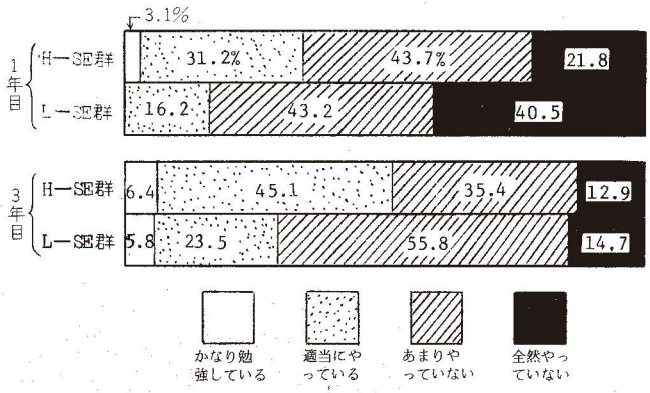
3年目の L—SE 群では，H—SE 群におけるよりも有意に勉学意欲のさがっている者が多く，あがっている者が少ない (x^2=7. 55, df=2, P<.025)。

勉学意欲に関しては，1年目では自尊感情の高低による差はないが，学年が進行し3年目になると差がはっきりしてくるといえるかもしれない。

5. 普段の勉強の程度

図—6は，普段（試験時期を除いた）の勉強の程度に関する回答結果を示したものである。

1年目，3年目ともに，勉強をしていない者が H—SE 群におけるよりも L—SE 群で多いという傾向は認められるが，いずれも有意差はない。



図—6 ふだんの勉強の程度

6. 学生生活の諸側面についての期待度と充足度

前項までは主に学業とのかかわりについてみてきたが，ここでは学生生活への適応をより広い側面から検討する。

(1) 期待度

まず，学生生活の諸側面13項目に対して入学時にどの程度期待していたかをみてみる。各項目の評定は「1. 全然期待しでいなかった～5.非常に期待し

た」の5段階でなされているが，以下では評定値の平均によって比較する。

図―7は1年目学生における H―SE 群と L―SE 群の期待度を示したものである。H―SE 群は「専門的知識・技術を身につけること」において L―SE 群よりも有意に期待度が高い（t=3. 26, df=67, P<.01)。「束縛をうけずに自分の生き方，人生について考えること」(P<.10),「真の友人をつくること」(P<.10),「自由な時間をエンジョイすること」(P<.10) では，H―SE 群の期待度が L―SE 群のそれよりも高いという有意的な傾向がある。また，有意差はないが,「学校の勉強以外に自主的な勉強をすること」,「異性の友人を得ること，恋愛」において，H―SE 群は L―SE 群よりも期待度が高いという傾向がうかがわれる。

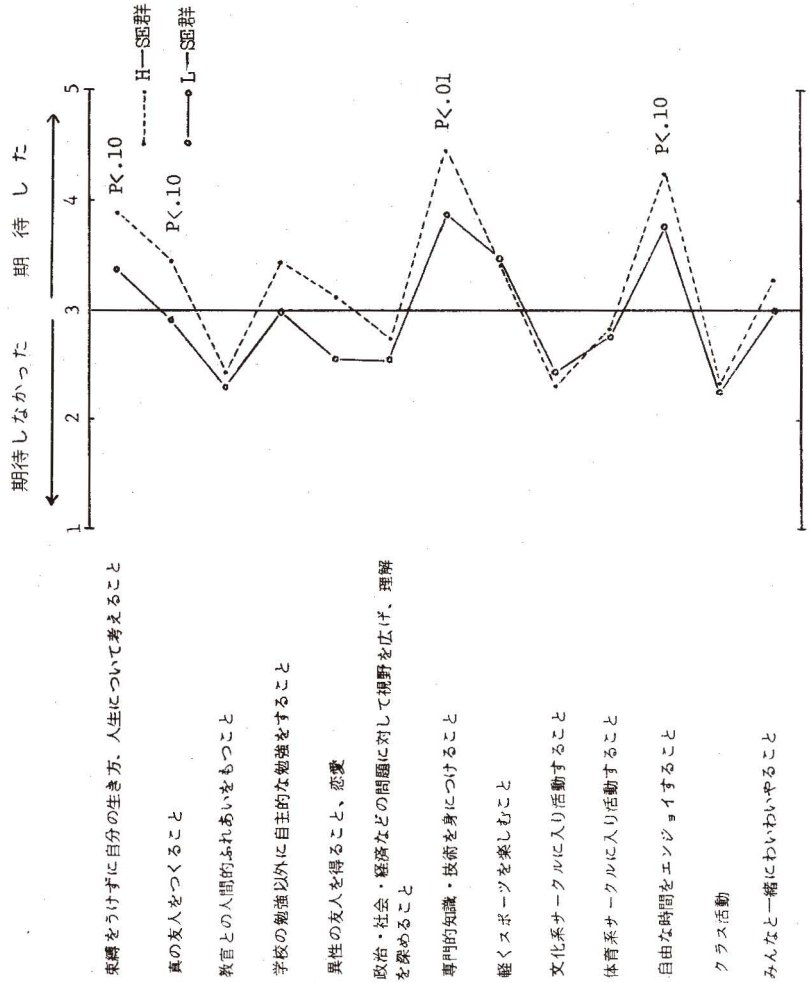
3年目学生における結果は図―8のとおりである。H―SE 群は「専門的知識・技術を身につけること」(t=2. 86, df=62, P<.01),「自由な時間をエンジョイすること」(t=3. 34, df=62, P<.01) で L―SE 群よりも有意に期待度が高い。また，有意差はないが，H―SE 群は「異性の友人を得ること，恋愛」の期待度においても L―SE 群より高い傾向を示している。逆に，H―SE 群は,「文化系サークルに入り活動すること」において，L―SE 群よりも有意に期待度が低くなっている (t=2. 30, df=63, P<.05)。

以上の期待度の結果をまとめると，自尊感情の高い者は低い者に比べて専門的知識・技術の習得，余暇活動や自己啓発，親友や異性の友人の獲得などに関してより積極的態度を有するといえよう。

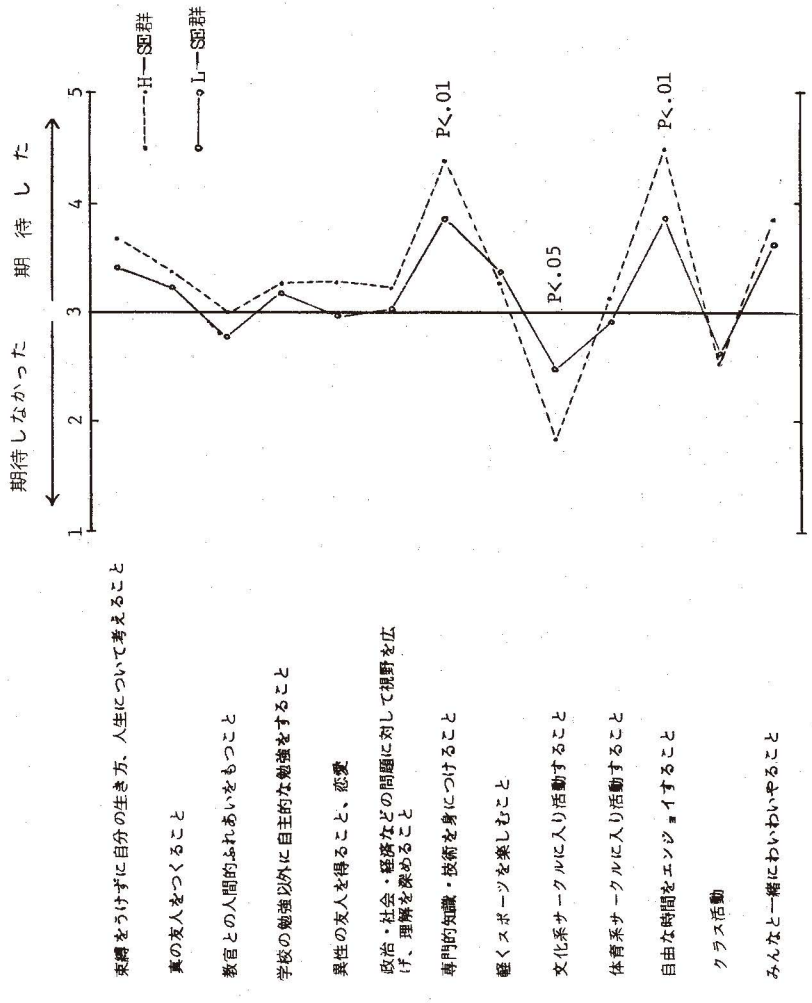
(2) 充足度

つぎに，上記13項目に関して現在どの程度みたされているかについて検討する。

図―9は1年目学生における H―SE 群と L―SE 群の充足度を示したものである。両群とも全般的に充足度の水準が低い点が注目されるが，L―SE 群は「真の友人をつくること」(t=2. 46, df=67, P<.05),「学校の勉強以外に自主的な勉強をすること」(t=2. 15, df=58, P<.05),「クラス活動」(t=2. 25, df=67, P<.05) の充足度において，H―SE 群よりも有意に低い水準を示してい



図—7 学生生活の諸側面についての期待度—1年目—



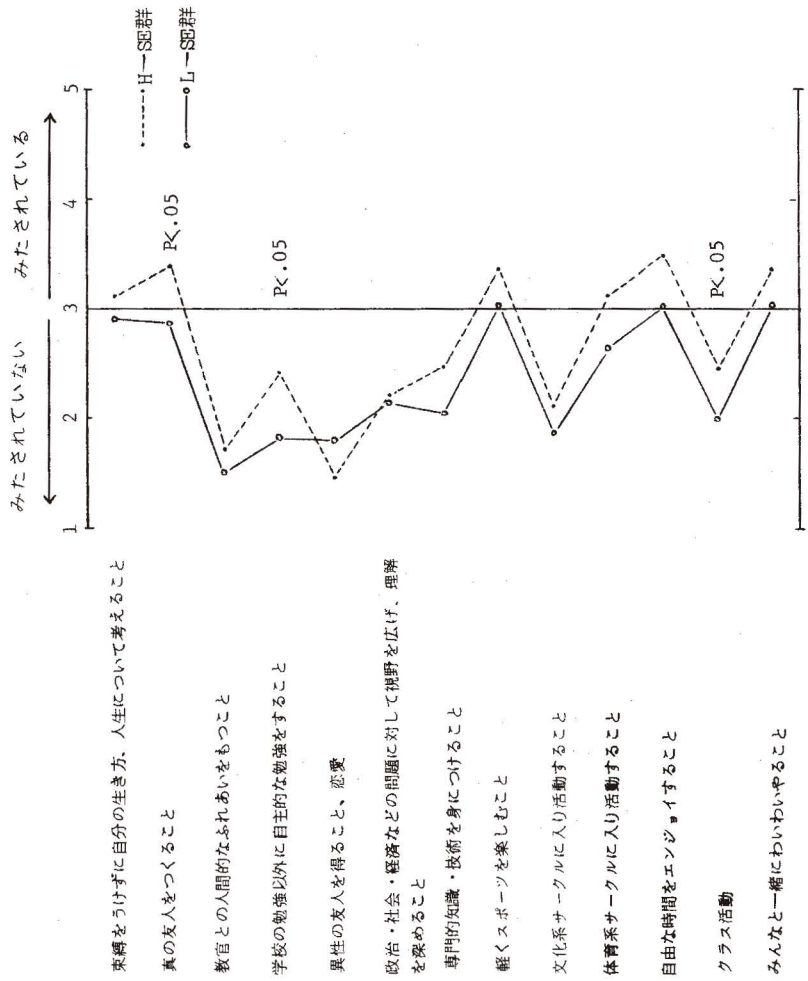
図－8　学生生活の諸側面についての期待度－3年目－

る。また，有意差はないが，「専門的知識・技術を身につけること」，「体育系サークルに入り活動すること」，「自由な時間をエンジョイすること」の充足度においても，L—SE 群は H—SE 群よりも低いという傾向がうかがえる。

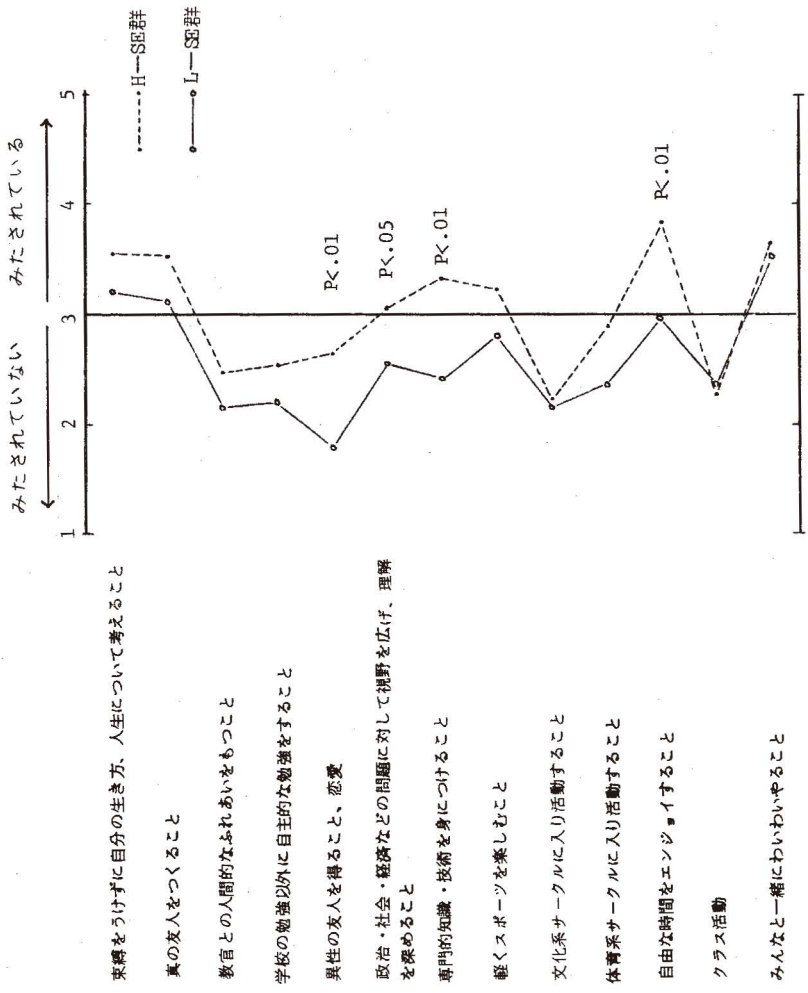
図—10 は 3 年目学生の結果である。L—SE 群は「専門的知識・技術を身につけること」(t=4. 51, df=63, P<.01)，「自由な時間をエンジョイすること」(t=3. 44, df=63, P<.01)，「異性の友人を得ること，恋愛」(t=3. 27, df=55, P<.01)，「政治・社会・経済などの問題に対して視野を広げ，理解を深めること」(t=2. 02, df=63, P<.05) の充足度において H—SE 群よりも有意に低い。また，有意差は認められないが，「束縛をうけずに自分の生き方，人生について考えること」，「真の友人をつくること」，「教官との人間的なふれあいをもつこと」，「学校の勉強以外に自主的な勉強をすること」，「軽くスポーツを楽しむこと」，「体育系サークルに入り活動すること」の充足度においても，L—SE 群は H—SE 群よりも低いという傾向を示している。

前項の期待度においては 1 年目と 3 年目の水準の差はあまり認められなかったが，充足度では両学年間で差の大きい項目がかなり存在する。「教官との人間的なふれあいをもつこと」，「政治・社会・経済などの問題に対して視野を広げ理解をもつこと」では，3 年目の H—SE 群および L—SE 群の充足度水準が 1 年目 H—SE 群，L—SE 群のそれよりも高くなっている。これらの面での充足度の上昇には学年進行による授業形態の変化や大学生活の長さなども関係しているものと考えられるが，3 年目においてこれら 2 項目に関する H—SE 群の充足度が L—SE 群よりも高いという結果は，それらの要因以外に自尊感情の高さもある程度影響することを示唆しているものと考えられる。また，「異性の友人を得ること，恋愛」と「専門的知識・技術を身につけること」では，3 年目 L—SE 群が 1 年目 H—SE, L—SE 群とほぼ同じ水準にとどまっているのに対し，3 年目 H—SE 群の充足度が有意な上昇を示している。これらの側面での充足には自尊感情の高いことがより強く関係するといえよう。

このほか，「自由な時間をエンジョイすること」では，1 年目 L—SE 群と 3 年目 L—SE 群の充足度が同水準であるのに，1，3 年目の H—SE 群はそ



図―9　学生生活の諸側面についての充足度―1年目―



図—10 学生生活の諸側面についての充足度—3年目—

れよりも高くなっている。この点でも，自尊感情の高い者のほうが高い充足感を得やすいといえるようである。

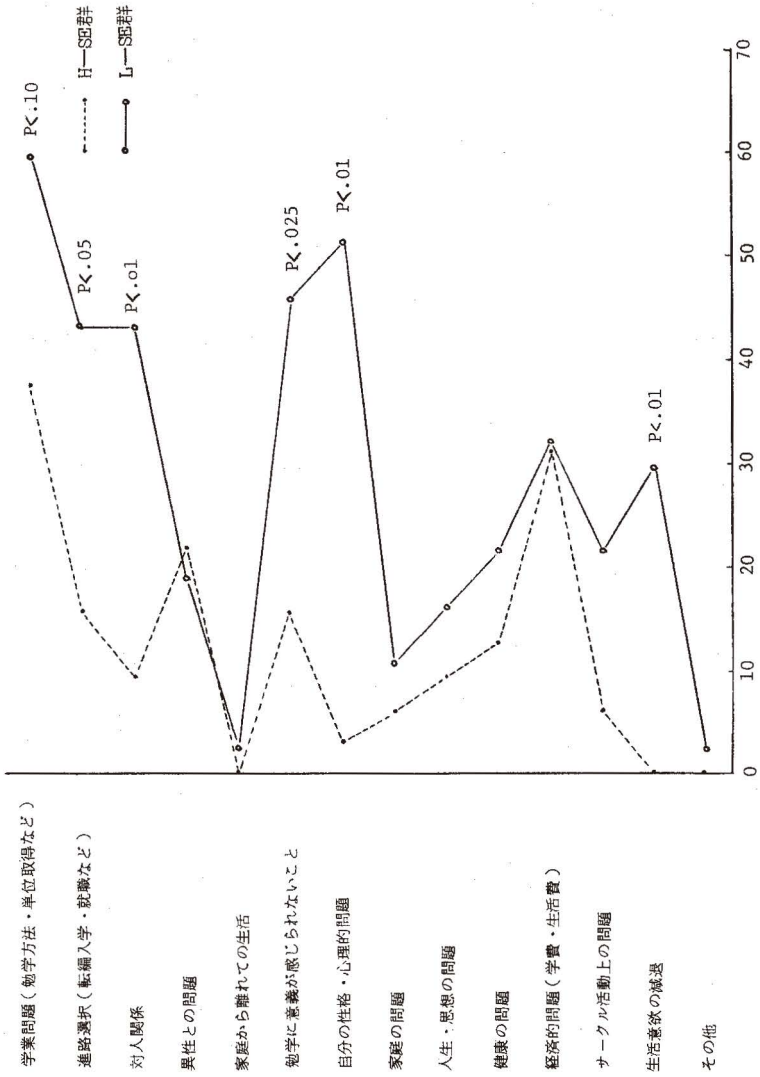
7. 現在の不安・悩み

図―11は1年目学生における結果である。両群の選択率を比較すると，「自分の性格・心理的問題」(P<.01)，「生活意欲の減退」(P<.01)，「対人関係」(P<.01)，「勉学に意義が感じられないこと」(P<.025)，「進路選択（転編入学・就職など)」(P<.05) において，H―SE群が有意に高くなっている。「学業問題（勉学方法・単位取得など)」では，H―SE群の選択率のほうが高いという有意的な傾向が認められる（P<.10)。また，有意差はないが，「サークル活動上の問題」においても H―SE 群は L―SE 群よりも選択率が高いという傾向がうかがえる。

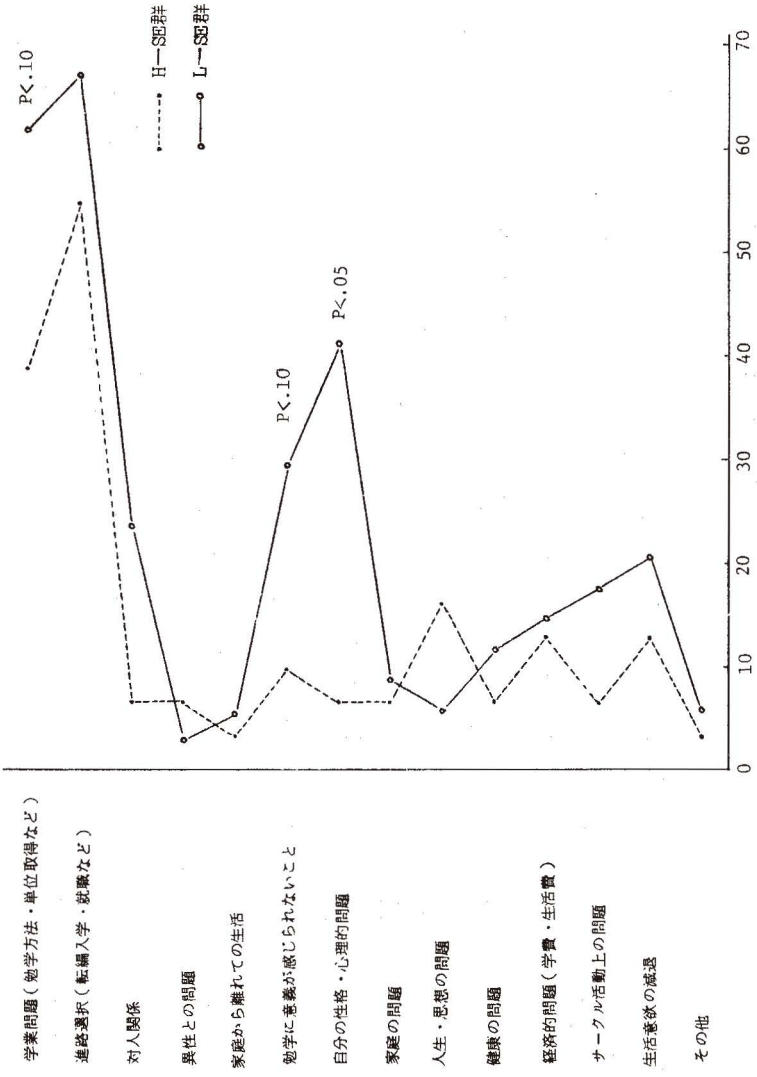
なお，自尊感情尺度の性質からいって，「自分の性格・心理的問題」に関する不安・悩みの多寡との関連を問題にするのは同義反復的であるが，ここでは項目群から除外せずに表示することにした。

3年目における結果は図―12のとおりである。H―SE 群は「自分の性格・心理的問題」(P<.05) で L―SE 群よりも有意に高い選択率を示している。「学業問題」(P<.10)，「勉学に意義が感じられぬこと」(P<.10)，「対人関係」においても，H―SE 群は L―SE群よりも選択率が高いという傾向が認められる。

以上の結果から，自尊感情の低い者は高い者に比べると自分の性格等についての悩みや対人関係の不安を抱くことが多く，生活や勉学への意欲減退を経験しやすく，進路や学業上の問題を感じることも多いといえるが，この傾向は1年目学生において顕著である。なお，3年目学生では，H―SE 群，L―SE群ともに「進路選択」の選択率が高くなっているが，これは3年目の秋ともなると就職等の問題がかなり現実的になってくるためであろう。他方，1年目の進路選択の悩みの内容は，むしろ再受験や転科をめぐるものが中心であると推測される。自尊感情の低い者ほど入学後そうした悩みを経験しやすいのであろう。



図—11 現在もっている不安・悩み—1年目—



図―12　現在もっている不安・悩み－3年目―

IV まとめ

本研究では，学生生活への適応過程において自尊感情が重要な役割をはたすものと考え，一般学生を対象に自尊感情の高い群と低い群を選び，適応に関する測度における両群の結果を比較検討した。それらをまとめると概ねつぎのようになる。

勉学生活の中心的な場である所属学科とのかかわりでは，自尊感情の高い者は，自分の学科に対して満足感を抱き肯定的に受けとめている度合が強く，そこでの学習に関する自己の適性について肯定的に評価し相応の自信を抱いているようである。他方，自尊感情の低い者は所属学科への満足度が低く，自己の適性についても疑問や不確かな感じを抱く傾向が強い。彼らは置かれた状況の中で自己を定位し積極的に歩み出すことが出来にくい面があると思われる。こうした傾向は，学年が進行し3年目になっても持続する可能性も考えられるが，1年目においては他大学受験，転科などの進路に関する迷い，悩みに結びつくことが多いものと推測される。こうしたことから，自尊感情の低い者は高い者に比べ勉学活動に消極的になる傾向が認められる。

学生生活の諸側面についての入学時の期待度および現在の充足度からみると，自尊感情の高い者は低い者に比べて専門的知識・技術の習得，真の友や異性の友人の獲得，自由な時間の享受，自分の生き方や人生について考えることなどに関してより積極的，意欲的姿勢を有することがうかがわれ，またそれらの面についての充足感もより強いようである。充足度の絶対的な水準は全体に低いが，3年目学生が多くの項目において1年目よりも高い水準を示している。特に，自尊感情の高い3年目学生の充足度が高い。そして，専門的知識・技術の習得，異性の友人の獲得に関する充足度では，自尊感情の低い3年目学生が1年目学生とほぼ同水準にとどまっているのに対し，自尊感情の高い3年目はそれらよりはるかに高くなっている。今回の資料は同一対象集団の変化を経年的にフォローしたものではないので，結論づけるのに慎重であらねばならないが，

これらはつぎのことを示唆しているとも考えられる。学年の進行に伴って多くの項目で充足度が向上する。しかし，それは単に学生生活の年数・経験が増加したり外的条件が変化するだけでは十分なものにはならない。より高い充足感を得るには，個人が積極的に自分の置かれた状況にかかわっていくことが重要なのであり，そこにおいて自尊感情のはたす役割が大きいということである。

充足度と表裏の関係にもある現在の不安・悩みの面では，自尊感情の低い者は，自己の性格・心理的問題，対人関係，勉学に意義が感じられないこと，勉学方法や単位取得の問題，生活意欲の減退などにおいて自尊感情の高い者よりも多くの訴えを示している。この傾向は1年目学生においてより顕著である。また，1年目学生では，自尊感情の低い者は高い者よりも進路選択の悩みを多くもっているが，これは前述のように他大学受験や転科などに関するものであると考えられる。なお，今回の調査では，学生が経験する悩みや問題についてごく大づかみの項目設定しかしなかったが，たとえば「進路選択」の場合学年によってその意味合いが異なる可能性がある。また，学年の進行とともに問題・悩みの焦点が変わっていくことも予想される。今後はより細分化した項目設定を行ない，前述の同一集団の経年変化の追跡の問題と合わせて検討を深めていきたい。

参　考　文　献

1) Erikson, E. H.: Identity and the life cycle. (New York: International Universities Press, Inc. 1959), (小此木啓吾訳編：自我同一性　誠信書房　東京 1973).

2) Coopersmith, S.: A method for determining types of self-esteem. J. of Abnormal and Social Psychology. 59, 87 (1959).

3) Rosenberg, M.: Society and the adolescent self-image. (Princeton Univ. Press. 1965).

4) Ziller, R. C., Hagey, J., and Smith, M.: Self-esteem: a self-social construct. J. of Consulting and Clinical Psychology. 33, 1, 84 (1969).

5) Lyell, R. G.: Adolescent and adult self-esteem as related to cultural values. Adolescence. 8, 29, 85 (1973).

6) Rathus, S. A., Siegel, L. J., and Justice, M. C.: Delinquent attitudes and self-esteem. Adolescence. 8, 30, 265 (1973).
7) 海保博之・山下恒男: 自尊尺度 (SEI) 作成の試み (I) 日本心理学会第32回大会発表論文集 33 (1968).
8) 松下 覚: Self-image の研究—Self-esteem scale の作成—日本教育心理学会第11回総会発表論文集 280 (1969).
9) 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子 井上祥治: Self-esteem に関する研究 (I), (II), (III), 日本教育心理学会第14回総会発表論文集 (1972).
10) 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治: Self-esteem の研究 九州大学教育学部心理学部門紀要 18, 2 (1974).
11) 室蘭工業大学保健管理業務報告第10号: 学生生活に関する調査報告書 (1983).
12) 星野 命: 感情の心理と教育 (一, 二), 児童心理 24, 7 および 8, 1264, および 1445 (1970).